

留学・求法・弘法の旅

——二十八人の育英生が論文を寄稿——

明治大学助教授
駒沢女子大学講師

阿部 慈園

(一)

老梅（漢名は臘梅）の香薰いまだ残る去る二月八日、横浜善光寺〓黒田武志（大圓）住職、曹洞宗〓にて第十三回留学僧辞令伝達式が厳修された。新規の久間泰賢・洪在生・山口菜生子の三氏と継続の清水晶子氏である。今回はまれに見る厳選であった。これで派遣国十七カ国（一

地域）留学僧総数が七十九名となる。もとより黒田理事長の大発願・大誓願の結晶にほかならない。

さて、昨年四月八日『横浜善光寺留学僧育英会論文集』の第二巻（発行所・成寿山善光寺、編集印刷・中外日報社）が刊行された。厳密な書評はひかえさせていただき、紹介に先立ってまず「留学」ということを考えてみたい。

(二)

留学とは、一般的に「よその国に在留して学問をすること」と定義されるが、明治以降のわが国では留学といえどもつばら欧米に赴いて新しい文化・文物を学び取ることであった。しかし、遣隋使や遣唐使のころは中国へ渡って学習することが留学（るがく）と称された。

中村元博士の御教示であるが、弘法大師空海の詩文集『性霊集』には、二種の留学僧が記録されている。その一つは、半年から一カ年中国に留まる、いわば短期留学の還学僧（げんがくそう）。もう一つは、平均数年、長い者は二十年に及ぶ長期留学の留学僧（るがくそう）である。空海自身も留学僧の一人で、延暦二三年（八〇四）、三十一歳の時入唐し、惠果阿闍梨（けいか・あじやり）より密教の真髓を伝授されて、三年滞在の後帰朝した。

(三)

さて、留学は旅のひとつである。柳田国男は、旅は他火（たび）であり、他所の火を経験すること、つまり異郷・他界を遍歴すること、日常とは全く違った他の世界に行くことであるという。

仏教僧の旅はおおむね二つに分けられる。一つは、真実の仏法を求めて他国に赴き、経巻を求め、正師をたずね、また遍路や聖地巡礼をしてみずからの心の浄化をはかる旅である。自分が何かを学び取るための旅であるから、「求法の旅」と名づけられよう。第二は、自己が見聞し、体得したところの法（さとり・真理）を他の国の人に伝えるための旅である。これは伝道布教の意味がこめられているから「弘法の旅」と呼ぶことができよう。

求法の旅の代表は、中国から仏教発祥の地イ

インドに学び数多くの経巻・論書とともに帰国した法頭(ほっけん)・玄奘(げんじょう)・義浄(ぎじょう)である。朝鮮半島からは謙益(ギョムイク)・玄太(ヒョント)が挙げられる。弘法の旅のごく著名な仏教僧として、インドから中国へ禅を伝えた達磨(だるま・ボーディガルマ)と偉大な訳経僧のひとり真諦(しんたい)を、また中国から日本へ律を伝えた鑑真(がんじん)と黄檗宗を伝えた隠元(いんげん)を、さらに東大寺大仏開眼の導師インド僧ボーディセーナの名を挙げる事ができる。

(四)

われわれの横浜善光寺留学僧の旅は、求法の旅にほかならない。

本論集の紹介に入ろう。

巻頭言は、黒田理事長の「なぜ留学僧育英会をつくったか」。理事長の、若き日の激しき苦し



き修行・行脚で得た「生かされていること」の気づき」が善光寺の開創・発展となり、御恩報謝の人材の育成となったのである。

序文は、ともに育英会顧問をつとめられる鶴見大学学長高崎直道博士の「日本仏教の光明として」および愛知学院学院長小出忠孝博士の「代償を求めない大慈悲行」である。いずれもきわめて示唆的な御文である。

次に、第八回から第十一回までのつごう二十八名の育英生（留学僧）が論文を投じている。以下名前と論文名のみを挙げる。

第八回生分として、

渋井修「カンボジアで」、ペルキ・ローフ（大玄）「未来の仏教と私の役割」、韓仁徹「未来社会の仏教と私」、韓京愛「二十一世紀の仏教と私の役割」、落合隆「風の葬送」、李俊秀「未来社会の仏教と私」の七編。

第九回生分として、

藤田一照「禅の国際化と私の役割」、キリメテイヤネ・ヴィマラワンサ「未来社会の仏教と私」、李鐘徹「二十一世紀の仏教と私の役割」、李泰昇「未来社会の仏教と私」、スワガタン・チャクマ「未来社会の仏教と私」、佐藤誠司「国際貢献の拠り所とは何か」、薫燕燕「政界平和と仏教徒の誓願」の七編。

第十回生分として、

嘉木揚凱朝「チベット仏教の未来と僧侶の責任」、孫順鎬「留学僧として私はこれを学びたい」、金英子「社会の中で生きている仏教を」、碓雄神「異文化の中で仏教を学ぶ」、サンガ・ラタナ「世界平和と仏教徒の誓願」、脇領至「仏教僧として私はこれを学びたい」、プラ・シャーンシャイ・キッティワンソー「二十一世紀の仏教と私の役割」、デイリッップ・クラール・バルア「大乘仏教をバングラデシュへ」、王文雄「これからの国際交流と仏教の役割」の九編。

第十一回生分として、

湛如「中国仏教の発展のために」、呂鉄「現代日本仏教思想の探究を」、如玄・ノバク「禅画を通して仏教の理解を」、遠藤博因「自己の究明としての仏教」、宇野恭章「インドにおいて密教の研究を」の五編である。

いずれも意欲的な論考である。

つづいて、「育英会の歩みと将来」における、育英会常務理事の佐藤俊明老師「仏宝の本山通度寺へ」と同事事・駒沢女子大学学長の東隆眞博士「タイ王国仏教つれづれ」は、それぞれ韓国・タイ視察の詳しい調査報告であるとともに、読んで楽しい旅行記の性格も有している。

前七回までの先輩育英生五氏の寄稿論文がつづく。安井隆同「仏教における生命観」、島崎義孝「アメリカ仏教のこと覚え書き『泥中の蓮華』の人々」、山本浄月「釈迦」、藤田一照「『赤肉団の学道』ということ」、キリメティヤネ・ウィマ

ラワンサ「タイ、ミャンマー、スリランカの瞑想センター報告」。

黒田理事長・東理事の「対談・釈尊御降誕を祝う」には、釈尊の御降誕の意義とその根本精神をくみとり、それをふまえた今日の仏教の蘇生が熱っぽく語られている。

最後に「横浜善光寺育英会十二年の歩み（黒田理事長）と英文四篇（黒田武志・高崎直道・小出忠孝・東隆眞）が添えられている。

(五)

願わくば、横浜善光寺育英生七十九人の留学僧のなかから、法顕・玄奘・義浄にまさるともおとらぬ、いや彼らを越えるほどの人材が育ちあがることを心から祈念してやまない。

（上智大学講師・東方学院総務兼講師）